

鍋島甲斐守

吉川英治

青空文庫

問う者が、

(世の中に何がいちばん多いか)

と訊いたところ、答える者が、

(それは人間でしょう)

と、云った。

問う者が又、重ねて、

(では、世の中に何がいちばん少いか)

すると、答える者が、

(それも人間でしよう)

と、云つたという話がある。

えどまちぶぎよう
江戸町奉行の鍋島甲斐守は、いつもその話を思い出して、
なべしまかいのかみ

その人間の中でもいちばん多いものは悪人ではなからうかと思ひ、
しろす白洲に出るたび、人間に嫌悪けんおを感じ、常に、不幸な職に就いたものだと、人に語っていた。

捕まえても捕まえても、街に罪悪は絶えないし、白洲は悪人を迎える事で、夜が明ると忙せわしかった。——いや、かえつて、捕まれば捕まえる程、意地わるく悪人の数が殖ふえるような気もちすらして来る。

『もう伝馬てんまろう牢には入りきれません。牢普請ろうぶしんでもしていたただか

なければ——』

下役が悲鳴をあげて、こう訴えるほど、甲斐守は、職務に精せいれ励いした事もあった。

ではそれだけ、街にその時悪人が減っていたかというところ、盛り場の事件も、岡場所おかばしよの情痴沙汰じょうちぎたも、夜盗も、強請ゆすりも、人殺しも、文政末期の世間には相変らず瓦版かわらばんが賑わって、江戸の街はすこしも澄んで来たとは見えない。

『これあいかん』

一時は、職を辞めようかと甲斐守は思った位であった。——然し、それは在職中の二年目ぐらい迄で、四、五年もたつと、彼の考え方はちがって来た。

『よくよく思うに、世の中に、ほんとの悪人などは一人もない』

と、人にも語り、自分もふかく信念していた。

『法ほうねんしょうにん然上人しょうにんのようなお方ですら、御自身、十悪の凡夫だと云

つておられる。親しんらん鸞上人は又——善人なおもて往おうじよう生を遂ぐ、

いわんや悪人をや——とすら明言しているのではないか。その心で観れば、世の中に悪人はいない筈だ。むしろ奉行所が無理に悪人をこしらえているに等しい』

それから後、甲斐守はたいへん気が軽くなった。彼は法令を、人間の善美をい活かすために用いるように心がけた。そして彼は、法然上人の念ねんぶつ仏ぶつにふかくきえ帰依して、このてんき転機を職の心に与えてくれた宗教に絶対の信仰をもち、社会政策と宗教とを一体にして、

自分の管下を、この世の浄土じょうどにしなればならないと考えていたのである。

二

その甲斐守が、きようは吟味所ぎんみしよで、めつたにない怒り方を示し、大喝だいかつしていた。

『だまれっ。——最前さいぜんから、何を訊ねても、ただ御尤ごもつともで、御尤で、とばかり申し居つて、それでは一向に量りょうけん見けんが、わからんではないか。和解いたすのか、せぬ気か、はつきりとお答えせいっ』

白洲には、七、八人の町人が、干ほしがれい鰈いのように平伏ひれふしていた。真中に出ている二人が公事くじの当人達であろう。一方は、六十ぢかい品のよい老婆で、小紋の小袖につつましく前帯をむすび、しきりと、涙をふいている。

又、もう一方のほうは、四十五、六歳の小づくりな町人で、これも至つて、気の小さい温おんじゆん醇んな男らしく、どこかに持じび病ようでもあるのか、艶のない黄ばんだ皮膚をしていて、細い眼のうちが薄黒く見え、その眼は絶えず、俯目ふしめになつて、恟々おどおどしていた。

甲斐守が怒りつけたのは、その男へであつた。

うしろの方に控えていた双方の町名主と付添つきそい人たちは、びくつきとして、金貸の彦兵衛ひこべえが、何どう答えるかと、唾つばをのんで見まも

つていた。

『……へいつ』

彦兵衛は、肉の薄い体を腰から折って、奉行のほうを額ごしに見ながら、米こめつき搗つきばったを繰返して答えた。

『……へイ、まことに、御尤様でございます。仰しやるとおり、重々、御尤ではございまするが』

甲斐守は、焦いらいら々々して、

『埒らちの明かんやつだ。その御尤さまをやめにせい。公事の御吟味について、こちらで訊くことだけを答えればよいのじゃ。——半

田屋の後家の云い分を、肯きいてやるのか、嫌いやか』

『おそれながら……その儀はどうも』

『和解せぬというのだな』

『貸した金と利とを、揃えてくれるというならば、和解いたしてもよろしゅうございますが』

『それなら、公事にはならぬ。……どうじゃ彦兵衛、そちも、生涯に一度ぐらいは、善き事をしては』

『よい事なら、いつでも致したいと思ひます』

『だから、云うておるのじゃ。おまえの事を、街の者は、鬼と云うておるが、甲斐守の眼から見れば、おまえは決して、元来そんな悪党ではない、肚の中には、やはり善性がある者と見ておる。』

『ただ高利貸という家業が、おまえを鬼に作っているのだらう』

『御尤でございます、その通りでございます』

彦兵衛は、欣うれしそうにもじもじした、細い眼を、よけいに細くして、奉行の顔を、知己ちぎのように見あげた。

『それみい、賞められれば、そちは欣うれしいだろう。些ささい細な善を褒ほめられてもそうだ。まして、大きな善をなせば、それだけ大きな欣うれびがある。鬼だとか、人非人ひとでなしとか、世間から死ぬまで唾つばを吐きかけられて居たくもあるまい』

『へい』

『生涯一度の善事をするつもりで、此このたび度の公事は取下げ、半は田屋んだやの後家ごけと和解してやれ。——半田屋は、そちが若年の頃に仕えた旧主ではないか。零落れいらくした旧主に高利の金を貸し、その抵か当たに、旧主の家族を追い出して、旧主の家にそちが住んでみい、

世間はそちを、愈々《いよいよ》、悪鬼か蛇蝎だかつのようになうぞ』

『へい』

『半田屋の後家おすげ』

甲斐守は、一方の老婆に眼をうつした。おすげは、奉行の取扱いに、感涙をながしていた。

『彦兵衛も、奉行のことばによつて、得心とくしんの態ていにみえる。そちの借金は、あまり法外ほうがいな利息故ゆえ、最前云うように利を下げてもらつて、元金は、年割とし、以後滞りなく彦兵衛へ返済とどこおいたすよ
うに』

『……………』

後家は、嗚咽おえつして、奉行の慈悲おがを拜おがんでいた。甲斐守は、きよ

うも一つ、祖師の法然上人によるこんでいただけの事をしたと思
い、自分も心が明るかった。

『わかったであろうの、半田屋の後家』

『あ……ありがとうございます。……それでは、私共のただ今住
んでいる店は、彦兵衛さんの云うように、今が今、明渡あけわたさない
でも、よろしゅうございませうか』

『よいとも、借金さえ返済すれば、彦兵衛にも異存いぞんはない筈じゃ。

——のう、彦兵衛』

すると彦兵衛は冗じょうだん戯ぎでも聞いている様に薄笑いをした。

『お奉行さま。それではまるで、あなたが半田屋へ金を貸してい
るような形になるではございませぬか。ただ今の御相談は、彦兵

衛にはおうけできませぬ。どうか、貸してある金は、私の物だということ、もう一応お考え下さいますように』

(憎いやつだ)

と、甲斐守は私情をうごかさずに居られなかった。

書記の机のほうを見て、

『証文を、もいちど見せい』

膝ひざへそれを取寄せて、甲斐守は、少しでも半田屋の有利になるような点をさがさそうとした。けれど、証文の文もんごん言ごんには、針ほどの穴もなかった。

旧主に貸した金は証書どおりに取立てることを得ない——と云う法令はないのである。むしろ法令は債権者さいけんしゃを守ってやる立場

にすらある。甲斐守は、法令の代行者である自分をきよう程、無力に感じたことはなかつた。

三

半田屋というのは、日本橋の田所町で老舗しにせの漆問屋うるしどんやだった。

漆光りになつた黒い四方柱が何本も目につくほど広い構えで、店み土蔵せどぞうと母屋土蔵とで四棟もあつた。

彦兵衛は元、漆の産地からそこへ雇ひなたわれて来た越中えつちゆうもの者で、毎日店頭みせさきで、他の者と並んで日向ひなたで漆うるし搔かきをしていたもので

ある。

それから廿年後になると、漆搔の彦兵衛は、こあみちよう小網町で金貸になつていた。反対に、半田屋の主は数年前に中風ちゆうふうで仆れる、家産は傾いて、昔は店の雇人だつた彦兵衛から高利を借りて、やつとここ一兩年を支えて来たというような始末。

(むかしはうちの店で働いていた男だから——)

後家のおすげは、どこかにそこを頼みとしている所があつた。

だが、期限が来ると、彦兵衛は、かしゃく仮借しなかつた。約束どおり、ていとう抵当にとつた家屋を明け渡してもらおうと云う。

貧乏はしても、おおだな大店ふうなに、家族は多かつた。後家は六十に

近い年であつたが、江戸でも草分くさわけの老舗しにせを、自分の代でつぶしては、先祖へも申しわけがないと思うのだった。——で、奉行所

の白洲に坐つてからというものは、幾度もここへ出て、

(今後は、自分が先に立つて、家族の生活くらしも質素に改め、息子や

雇人たちをも自身で督励とくれいして、きつと両三年の間には、借しゃくぎ

財いも返すようにしてみせるから、どうか、彦兵衛どのに、慈悲

と申うて、又むかしの誼よしみを申うて、家屋の追立だけは、暫くゆ

るしてもらいたい)

哀願しては、奉行の前で、泣くばかりであつた。

(不愍ふびんだ、何としても)

と、甲斐守は、この公事を、和解させようとした。最初は、与よ

力吟味りきぎんみにまかせておいたのであるが、どうしても、彦兵衛が頑

として、公事を下げないというので、ここ二回ほど、甲斐守自身

が、彼をよび出しては、説得せつとくを試みて来たのであった。

だが、甲斐守も、今日は匙さじを投げてしまった。——今、証書を

手にとつてみても、法律から見て、どこを衝くという隙すきもないし、

何か、彼の尻尾しっぽでもつかまえてと考えても、この彦兵衛には、

ごもつとも
御尤の彦兵衛

と云う緋名さえある位で、脅おどしても、賺すかしても、又、撲なぐる権けんま

幕くを見せても、

(ハイ、御尤で、ハイ御尤で)

と、御尤一点張で、頭ばかり下げている男なのである。

この上は、情を衝つくよりほかはないと、甲斐守は思った。どんな極悪といわれる人間にも、古井戸のようなもので、悪い水を汲く

み尽せば、やがて底のほうから真清水ましみずが湧いてくる例を、幾たびも見ているからである。

四

『どうじや彦兵衛、もいちど考え直さぬか。成程なるほど、御法規から見れば、おまえの云い分がたしかに適かなつておる。だが、人道というものから見ると、おまえは、旧主の首を金の力で縊くつたことになるぞ。御法規がそちを罰することが出来ないにせよ、世間がそちをきつと憎むと思うが』

『御尤でございます』

『本音を吐^はけ、真実をもつてお答えせい』

『イヤ、私も、それは御尤だと考えますので——』

『ではなぜ、和解してやらぬか』

『私が承知いたしても、証文が承知いたしませぬから』

『そちの書かせた証文、そちの意志で何とでもなる』

『そこが、少々、世間と手前^{てまえ}とちがうのでございます。手前は、

証文に使われている雇人で、証文を自由にする主人ではござい
ません。それ故に、人様へ金を貸せる身分になれたのでございま

『そちの旧主が、あのよう^{なげ}に嘆いてるのを哀れとは思わぬか』

『御尤でございます。——けれど世の中に、金を借りる人間ほど

勝手なものはございませぬ。借る時は手前を神か阿弥陀様^{あみださま}のよう

におが拝みます。さあ今度は、返すという段になると、人を鬼呼ばわりしたり、居留守いるすをつかったり、罵詈譏ばりざんぼう 誹いたり、あげくに、払いもせず、脅おどすという人間もございます。百人へ貸して、九十九人までがそれなんで、哀れをかけてやる気になどなりませ
ん』

『然し、此度の場合は、旧主ではないか。かりにも、其方の奉公した店が、其方の一存で潰つぶれるか立つかの境さかい、見殺しにしては、寝ざめがよくあるまいが』

『……………』

又、御尤ですと云うかと思うと、彦兵衛は俯向うつむいたまま黙つていた。

たたみかけて、

『一体、あの家を抵当かたに取つて、そちはすぐ転売する気か、他へ売るにしても、半年や一年は空けておかねばなるまい。それよりも、そちの生涯の一善になれば、こんなよい事はあるまいが』

甲斐守が諭さとすと、

『いえ』

と、この男にしては、めずらしく強く首を横に振つた。

『手前がすぐ引移つて住むつもりでございます』

『住居にする？ ……でもそちは、養女のお高とただ二人暮してはないか』

『でも、いちどは、住むつもりでございます。そのわけは、手前

はあの半田屋の大旦那に、そのむかしあの店頭みせさきで、牛か馬かの
ように、口ぎたなく叱言こごとをいわれ、足蹴あしげにされたり、漆棒うるしぼうで
撲られた事もございます。そんな時には、往来には人だかりがし
て、人が撲られるのを面白そうに見物し、お帳場ちやうばには、そこに
いる御新造ごしんぞうさま様が、すずしい顔をして見ていらつしやいました。
そのあげく、半田屋のお店から抓つまみ出された手前でございますか
ら、いちどは住んで、往来へ向けて自分の名標なふだを打たなければ氣
がすみません。ハイ、お奉行様の仰せも、半田屋のおかみさんの
仰せも、御尤でございりますが、そんな次第でございすから、手
前は、お上の御法と証文おもての面どおりに従いとうぞんじます』

そう云つて、彦兵衛は口のうちに、

『なむあみだぶつ。なむあみだぶつ……』

と、念仏をとなえていた。

この男も、奉行の鍋島甲斐守と同じように、手頸てくびの奥おくに数珠じゆずを
かけていたのであった。

五

たどころちよう
田所町たどころちようの草分くさわけだった半田屋は戸を閉めてしまった。その
後へ、彦兵衛は自分で行って、名標くぎを釘で打って来た。

『あそこへ住むと、行燈あかりも一つや二つでは間にあわない。障子しょうじ
の貼はりかえだけでもたいへんな事になる。これは考えものだ』

名標は打ったが、住む事は断念したらしい。

そのかわりに、「売貸家うりかしいえ」の札を貼った。

家作かさくはほかにもたくさん持っていた。彦兵衛の仕事は、毎日家賃と利子の取り立てに廻まわることだった。

『家主おおやさん、水口みずぐちの閼しきいを修繕なおしてくれなくつちや困るじゃねえか。もう腐っているんだ』

『御尤でございます。何とかいずれ』

そんなふうには、どこへ行って、どこを押されても、御尤で引退つてくる。

『てめえ位、猫ねこツ被かぶりはねえぞ。屋根を修繕なおさねえうちは家賃はやれねえからそう思ってくれ』

嘯鳴り^{どな}つける者もままあるが、それに対しても、エヘラ笑いと、御尤^{ごより}さまであつた。

養女^{むすめ}のお高は、夕方、父の帰りのおそいのが何より心配だつた。

(今にあいつ奴^め、きつと、碌^{ろく}な死にざまはしねえぜ)

などと世間の声が、自然彼女の耳へも入るからであつた。

六

夏祭りの宵^{よい}である。杉の森神社の御輿^{みこし}が、汗のにおう町の中で揉^もんでいる。

お高の家だけが、齒の抜けたように、祭礼^{まつり}の提灯^{ちようちん}が燈^{とも}つて

いなかつた。養父の彦兵衛は、そんな費用も惜しんで、町内の交際きあいを断つていた。

格子こうしの外に出て、お高は近所の軒のきの灯を見ていた。お高は美しい着物を着ていたが、

(こんばんは——)

と、ことばをかけて通る者もなかつた。むしろ、彼女の美貌びぼうまでが、養父の蓄ためてある金と共に、呪咀じゆその的に見られていた。

『……どうしたのだろ?』

世間の中の淋さびしさには馴なれていたが、家の中の淋さびしさには絶たえかねるらしい。お高は、帰りのおそい養父ちちを、しきりに待ちわびていた。

『民谷たみやさんの家で手間てまをとつているかもしれない？ ……』

そう考えると、お高は急に、不安になった。民谷銀左衛門たみやぎんざえもんに新之助という浪人者の父子おやこの家である。その父子の住んでいる浪宅は、つい近所の蠣浜橋かきはまばしの向うなので、日濟金ひなしあつめのいちばん仕舞しまいに寄る事が例だった。

『もしや又？ ……』

格子を閉めて、お高は、涼みながら蠣浜橋を渡って行つた。途とちゆう中ちゆうでも会わなかつた。橋向うの材木屋の裏長屋に、民谷父子は住んでいた。

蚊かが顔へぶつかつてくるような露地ろじだった。案のじようそこへ入ると、薄ぐらい明りのさす門かどぐち口で、養父ちちの聲がしていた。

『弱りましたな、御都合は百も二百も御尤でございですが、手前のほうも、渡世とせいでして、そうはお待ちができません。——証書の表どおり、お預りあずかしてある後藤彫ごとうぼりの目貫めぬきは、他へ売払いに出しますから、どうかおふくみ願いたいもので』

決して怒ったことのない彦兵衛であつた。こういう最後へ来ても、顔いろや声に感情を出してはいない。

手をつかえているのは、人品はいやしくないが、繕よれよれ々になつた帷子かたびらを着て、貧しげな前差まえざし一本を帯びた浪人で、彦兵衛よりは年もずつと老とつてゐる民谷銀左衛門であつた。

『あれを売られては困り入る。せめて、もう二月ほどの御猶予ごゆうよを』
『でも証文の表には、期限までに返済しない時には、何時いつでもお

払い下されてさしつかえないとありますが』

『実は……実はその……申し難いがあれば他人の品で、その方の
推すいきよ拳こぶしに依つて、近いうちに、仕官のほうの話も纏まとまろうと成つ
ているところ、伴せがれ新之助も、唯今ちようどそのお宅へ伺つておる
所故ゆゑ、せめて、せがれの戻る迄——』

『御尤ですが、期限はきのうで切れているので』

『でも、きのうの今日では、あまりといえば』

『はい、お気の毒ですが』

『お待ちくださらぬので』

『おいとま致します』

『彦兵衛どの！』

外へ出て来て、銀左衛門は、彼の袂たもとをつかまえた。

『万一、あの目貫が、他人手ひとでに渡つては、われ等父子、御恩のあ
る方へ、生しょうがい涯がいあわせる顔もなく、又、せつかくお骨ほね折おりくだ
されている仕官の口も、失うてしまわなければなりません』

『ご尤です、お察しはいたしますが』

『決して、元金利子共、一文も御損はおかけいたさぬつもり。そ
れに、拝借した金子は二両、あの後藤彫ぼりの目貫は、少くも廿枚以
上の品と承知しておる。それではあまり悪あくどいではないか』
『イヤ、ひどい蚊ですね、離してください。いちいち御尤さまで、
はい、御尤で』

彦兵衛は、相手が怒りがいのない程、頭ばかり下げていた。

そして、逃げるように露地を出てくると、

『待てつ、人非人ひとでなしつ、もう一言いう事があるつ、待てつ』

追いかけて来るあしおと蹠音がした。

七

『あつ……ひ、ひどい奴だ』

ぞうり草履を両手に持って、彦兵衛は自分の家の台所へ馳かけこんで来た。

『お高——水を取ってくれ。お高』

返辞がないので、自分で流し元へ足を入れて、ざぶざぶと泥どろあ

足を洗い、裏口をきよろきよろしながら、暑いのに、戸を閉めて、心張棒しんぱりぼうをかつてしまう。

『……どこへ行つたんだ？』

家の中を見まわして、彦兵衛はつぶやいていたが、すぐ次の暗い部屋へ入つて、腕くびから数珠はすを外し、

『なむあみだぶつ、なむあみだぶつ、なむあみだぶつ……』

彦兵衛にたつた一つの道楽どうらくはこれだった。自分の心に咎とがめるような事をした後では、きつとそこへ入つて念仏ねんぶつを云う。念仏さえ云えば、どんな業ごうもたちどころに消滅しょうめつするもののように考えているらしいのである。

『……なむあみだぶつ、なむあみだぶつ』

今夜はすこし気持が悪かったとみえて、その念仏が長かった。

蠣浜橋たもとの袂たもとで、狂氣したような銀左衛門につかまつて、頬ほぺたを二つ三つなぐ撲られ、何をいわれたか、こっちはただもう御尤の一点張りいのちで、生命いのちから逃げて来たのであつた。

(もう来まい)

とは思うが、あの時、刀のつかをにぎつて睨にらんだ銀左衛門の眼がまだこびりついていて、背すじから恐怖が去らなかつた。

『なむあみだぶ、なむあみだぶ……』

すると、勢いきおいよく、表の格子があく音がした。

『——お高かい？』

首を伸ばすと、途端とたんに、祭礼まつりの揃そろいの浴衣を着た若い男が、泥

足のままたたみ畳へおどり上つて来て、祭団扇まつりうちわで外あおを煽あおいだ。

『やあーい、交際ひとでなしい知らずの、人非人の、我利我利がり野郎の家へ、天王様を振り込め』

向う側の軒下を揉んでいた樽神輿たるみこしが、掛け声をあわせて、此つ方へ寄つて来た。

金棒かなぼうだの、鈴ねの音だの、汗いきれの掛け声に勢をつけて、まず、神輿の鼻を、どうんと格子へぶつけた。

地震のような家鳴やなりが次に起つた。ふすまも障子も滅茶滅茶めっちゃに踏みあらしして、更に、座敷ざしきの真ん中へ、樽神輿たるみこしを抛ほうり出したのである。

『どこへ失せた、御犬野郎おいぬは』

『キリキリ舞して、二階へ逃げ上りやがった』

『ざまあみろ』

物^{ものすご}凄^{ばくしやう}い爆^{ばくしやう}笑^{わら}が、家の中と家の外で起つた。そして、ふだ

んの云いたい事を、一人一人、口を極^{きわ}めて、云いちらした。

その騒^{さわ}ぎの戸^{かど}外^{がわ}から、

『お高どの、——お高どのには居ませんか』

青^{あお}ざめた顔^{かほ}つきの若い浪^{なみ}人^{ひと}者がさけんだ。

八

ぶち壊^{こわ}した家の中へ、樽^{たる}神^{かみ}輿^{こし}を抛^なり出^でしてやすんでいた若^{わか}衆^{しゆ}

うれん
連は、

『や、寺小屋の息子さんだぜ』

『新之助さんだ』

と、ちよつと白^{しら}けて見えた。

新之助の血^{けつ}相^{そう}が、いつになく優しさを消していたからである。

もう、嫁もあつていい年頃なのに堅くて親思いなものだと町内ではうわさのいい若者だった。

『おまえ達何しているのか』

『見た通りでさあ。こんな事あ、天王様の祭礼^{まつり}にやあめずらしいこつちやあねえんで』

『何ぼ何でも、余りといえは乱暴な。——町役人の来ないうちに、

はやく退散したらどうだ』

『その町方様からして、やれやれと云っているんだから、来る筈はありません』

『何せい、ここを出てくれい。いやと申せば、新之助が、そち達を相手にするぜ』

『およしなさい新之助さん、おまえさんはここのお高と、仲がいって噂だが、あんな親父おやじを持つて御覧じ、今に後悔こうかいしますぜ』

『よけいな事を申すな。神輿を出せ』

『おまえさんを相手に喧嘩けんかしたって初まらねえ。じゃあ、新之助さんの顔めんに免じて、出してやろうか』

九

海嘯つなみの通った後のような有様だった。勿論、明りも消えている。壊れた窓こわのすだれ越しに、向う側の祭礼まつり提灯の明りが、かすかに流れこんでいるだけである。

『——お高さん、お高さん』

新之助は、その中に立って、呼んでいた。

台所の戸の外で、

『ここですよっ……開けてくださいっ……戸があかないんです』
お高の声だった。

新之助が走って行ゆこうとすると、その前に戸が外れて、転び込

むようにお高が入って来た。

『お父さんは？ ……お父さんは？ ……』

『知らんっ』

抱きしめた男の手のつよさと、その顔いろの蒼あおざめているのに
気づいて、

『し……新さん……どうかしたんですか……どうかなすったんで
すか』

『おわかれだよ、おまえとも』

『えっ』

『………』

深い息をついて男はうなだれてしまった。

お高は、おののいて、泣き声になりながら、新之助の胸をゆすぶった。

『どうしてですつ……そ、そんな……そんな事、わたしは嫌です』
『おまえの父親にあとで聞いてくれ』

『……わかりました。じゃあ、お父さんが今夜、むごい催促さいそくをしたので、それで新さんも、怒ったんですか。かんにんして下さい。お父さんはまだ、私とあなたの仲を知らないのですから』

『それだけじゃない』

『では、……いったい何うしたのですか』

『おれの父は』

新之助は、おえつ嗚咽をのんで、

『——おれの父の銀左衛門は、たった今、恩人の邸やしきへ行つて、自じ害がいした』

『あつ——うちのお父さんの為に？』

『いう迄もない事だ。ここへ来たのは、彦兵衛を斬つて、父のうらみを慰めようとして来たのだが、この土足の痕あとを見ては、それも愚おろかと考え直した。——お高さん、これきりだぞ』

『待つてください。し、新さん、私をつれて逃げて下さい』

『ばかなつ、仇かたきの娘こを』

『仇でしようか。——ふたりの仲は』

『世間がゆるさない』

『では私に、死ねというようなものです。……新さん、私は、わ

たしはもう……ただの体じゃあないではありませんか』

『……………』

新之助は、闇やみの中の又闇の中に、もう一箇の人間のかたちになりかけた一塊かゝいの血液を思いうかべて、自分が確かに為した事の結果に、慄然りっぜんとおののいた。

——男女ふたりは裏口から出て行つたらしい。

彦兵衛は、階下したのささやきを、梯子はしごだんの上からそつと首をのばして聞いていた。

(心しんじゆう中ちゆうなどしはしまい)

そう考えて、自分をなぐさめたが、生きてゆくとしたら、あの男女ふたりはどうするだろう。

階下したの金箆かねだんす筒へ、手をかけた様子もない。金を持って出ないとすれば、死ぬ気ではないかとも疑われる。

『五ツの年から、今日まで育てて来た養女むすめだ。——あんな者に持つて行かれちゃあ……』

彦兵衛は急に、お高の体が、金のように惜しくなった。妊娠にんしんしている、子どもは後でどうにでもなると思う。

『そうだ』

すぐ裏口から彼は外へ追いかけて出た。

男女ふたりの影は、もう見当みあたらなかつた。だが、見当つても、新之助

へいきなり食つてかかる事は、多分な危険があると思つた。お高を奪り返せる自信もないし、うかつに寄りつけそうもない気がする。

『……どうしよう』

自分の力の及ばない場合というと、彦兵衛はいつでもすぐに、お上の御法規というものを頭脳あたまの中に持ち出してみる。国家の法律は、自分のために出来ているように考えているらしかった。

『おねがいです』

自身番じしんばんへ馳けこんで、ちようど外の涼み台で、祭りの御神酒おみきを酌くみかわしていた番太ばんたや、同心どうしんたちへ早口うったに訴えた。

町方の役人たちは、口をつぐんで、顔を見あわせた。今も今と

て樽たるみこし神輿しんごのうわさをしていたところだった。青ぐろく引つ吊つれ
ている彦兵衛の顔を見ると、同心たちは、おかしくなったのであ
ろう、干鯛するめを裂きながら、笑つて云つた。

『彦兵衛、それやあ、いつその事、お奉行所へじかに駈け込んだ
ほうがいいぞ。なぜなら、相手が侍だし、新之助の父親が、腹を
切つたというその出先は、雲州うんしゅうこう侯こうの重臣のやしきらしいんだ。
ちよつと、厄介事やっかいごとだからな』

『そ、そうでしょうか』

彦兵衛のあたふた駈けてゆくうしろ姿を見送つて、涼み台で又、
笑はいばなしが弾はずんだ。

たてつづけに喋舌しゃべつて訴える彦兵衛のことばを、鍋島甲斐守は、一口も挾はさまずに、終りまでじつと聞いてやっている。

『うム』

うなずいて――

『では彦兵衛、そちの訴えは、養女を取り戻してくれというのだな』

『は、はい、左様にござります』

『くれてやらぬか、どうせ、好きな者同士、無事で暮しさえすれば、それでそちも安堵あんどであろうが』

彦兵衛は、いつも頭の低い構えと口癖くちぐせを今夜はわすれ果てていた。すこし反身そりみ気味になつて、理屈をこねた。

『お奉行様、それでは、おそれながらお上の御法というものが有つてないようなものになりはしますまいか』

『なぜ』

『駈落かけおちもの者は、御法度の筈でございます。捕まえて、日本橋のた

もとに、曝さらし者としてくださるのが、御法だと覚えておりますが。

……まして新之助という男は、祭礼まつりの神輿をケシかけて、手前の

家を、野原のように若者に踏み荒させ、そのごたくさまぎ紛れに、養

女すめを攫さらつて行つた悪い奴でございます。これを御成敗ごせいばいくださら

ないでは、手前ども力の弱い町人は、安心してお膝ひざもと元に住んで

はおられません』

『なるほど成程、おまえはなかなか御法規に明るいの。いかにも、そういう御法度はあるが、かけおちごと駈落事などは、めった滅多に、ほんとに曝し者にいたした例はすくないのじゃ、——だが、望みとあれば手配をしてつかわそう』

『ありがとう存じます』

『然し——新之助のほうから、娘は返してやるが、その代りに、父親の生命いのちをもどしてくれという正当な訴えが出たらそちは何うする』

『民谷さんは、自分の考えで、自分の生命をちぢめなすつたのでございます。手前の知ったことではございません。又、その手前

を罪にする御法規はないとぞんじますか』

『いかにも、そういう御法令はない。——けれどそれは町人のそちと、御法規とのあいだにだけ通用する話だぞ。侍さむらいという者同士になると、彼等のあいだには、御法規も御法規だが又べつな義とか情とかいうのが重んじられておるからの』

『何と云つて来ようと、この世に、御法規ほど、動かされないものはないとぞんじます。はい、そんな事を申して来ても、受けつけませぬ』

『では、よいように、話し合え。——実はそちの来る前に、松まつだ平出雲守殿いらいずものかみ御家中から、云々しかじかと訴えが出ておるのじゃ。わしの手でそちを縛くくるいわれはないが、雲州侯の家中が、そちがこ

こちらから帰るのを門の外で待ちうけているかも知れぬ』

と、云つてすぐ、

『立てっ』

と命じた。

『……………』

彦兵衛は起たたなかつた。いや起てないのかもしれない。わなわなとふるえているのである。

『立てっ、彦兵衛』

『ちよつ…………ちよつと…………お待ちくださいませ』

『なんじや』

『今のおことばは、まったくでございましょうか』

『奉行はうそは云わん』

『それでは、私は、ここを出れば、殺されるかも知れませんが』

『銀左衛門の知己ちぎどもが、事情を聞いて、甚はなはだしく立腹しておると

いうことだ。どういう事があるのか分らん』

『申しかねますが、今夜は、どこか、御牢内ごろうないのすみにも手

前を置いていただけられますまいか』

『牢へ泊りたいか』

『は、はい』

『一晩というわけにはゆかぬな。三年も入れ、そして、少し自分のして来た事を考えてみぬか。おまえの為に入っている人間も、十人ぐらいいるだろう』

『三年などと、そんなには、及びませぬ』

『では、出て行け。そちを縛しばりはせん』

『……………』

『それとも入るか』

『……………』

彦兵衛は両手をついて、白洲へしがみついたまま、動かなかつた。その手頸てくびを、数珠の輪が巻いていた。

突ツ立つた儘まま、甲斐守は、恐こわい眼でジツとにらみつけながら、肚はらの底から憤いきどおりをもつて云つた。

『わ、悪いやつじゃっ！』

そして、自分の腕くびに掛けていた数珠をふツつり断たち切つて、

彦兵衛の頭へたたきつけた。

(昭和十一年九月)

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・43 新・水滸傳（二）」講談社

1967（昭和42）年6月20日第1刷発行

初出：「オール讀物」文藝春秋

1936（昭和11）年9月号

※初出時の表題は「悪党祭り」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年2月14日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

鍋島甲斐守

吉川英治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>